

## 書承から口承へ

### 大島廣志

#### 一、伝承は滅びるか

故大林太良が、日本口承文芸学会創立20周年記念大会（一九九六年六月、於國學院大學）で講演した内容は大変刺激的であった。後に『口承文芸研究』（20号、一九九七）に掲載されたので若干引用すると、「客観的に考えてみると、口承文芸はその歴史的使命を終え、口承文芸の時代はすでに終わつたか、あるいは終わりつつある」というものである。大林は、人類文化史の中での口承文芸の歴史を、発生・展開・終焉と大局的に論じ、終焉の理由とこと、口承文芸を担つてきた社会的集団（農民層）がなくなつたこと、文字を使える人ばかりになつたことの二点を挙げている。確かに「昔話を伝承していた農民がいなくなり」り、「子供は昔話を本で読む」状況になつたが、口承文芸、中でも昔話伝承の幕を下ろすことについては、やや性急な感じもある。

この大林発言に触発されて、日本口承文芸学会では、『口承文芸研究』において、「口承文芸研究の課題」（20号、一九九七）を

論じ、「口承文芸の現在―日本」（21号、一九九八）、「口承文芸の現在―世界」（22号、一九九九）という小特集を組み、日本では地域別、世界では国別の口承文芸の現状把握を試みた。また、一九九九年十月には、第38回研究例会・シンポジウム「口承文芸の未来―どのように継承されるべきか」が行われた。題目とパネリストは、「伝承してきた昔話」（花部莫雄・川森博司）、「現代の民話」（米屋陽一）、「ストーリーテリング」（藤野時代）、「作業歌」（岩井正浩）であり、題目からも分かるように昔話を中心としたシンポジウムであった。司会の川田順造は、

現代に起こりつづある変化がどれほど大きいものであろうと、人間があり、口承文芸がある限り、語りや歌の「場」も、その「場」でのパフォーマンスも、語り手や歌い手と聞き手の関係もあり、それがまた生きたものである限り、継承もあるに違いない。もし消滅したものがあるとすれば、それは研究者が「伝統的に」求めていたものが、消滅したとみるべきなのだろう。（注<sup>1</sup>）

と、シンポジウムのまとめの中で述べている。将来を見据える上で重要な發言といえよう。「伝統的」な立場に立つか、「今」の立場に立つかによつて議論は分かれるであろうが、昔話の継承の問題は、総論から各論へ進むのが今後の課題ではないかと思う。現在も昔話の語り手は存在する。しかし、圧倒的に多いのは、文字を読み、覚え、語るという新しい語り手たちなのである。大都市だけではなく地方都市でも、この傾向は年々強くなつてきつ

つある。これはとりもなおさず、書承から口承へということに他ならない。

そこで私は、日本口承文芸学会第42回研究例会（二〇〇一年九月）のシンポジウムとして「書承から口承へ—伝承は滅びるか」を企画した。このシンポジウムの題目とパネリストは次の通りである。「書承から口承へ」（大島廣志）、「ふくしま未来博の語り」（小野和子）、「新たな語りの現状」（櫻井美紀）、「子どもたちの語り」（根岸英之）。現在の語り手の諸相を捉え、繼承という視点からそれぞれの考え方述べてもらつた。」書承から口承へ“という共通項は、現在の語り実践の根幹の問題でもあると思うので、例会発表を改めて述べてみることにする。

## 二、書承から口承へ

昔話は口伝えされてきた文芸である。しかし、昔話のすべてが口伝えの中で生成、伝承されてきたわけではない。いつの時代でも、書承文芸つまり、文字として書かれたものとの交渉はあつた。ここでは現在に通じるものとして、明治・大正期において書承から口承へ移つた昔話の例を示してみよう。

グリム童話の翻訳・翻案（翻訳と異なり、風俗・地名・人名を自國のものに改変したもの）は、明治一九年（一八八六）のローマ字表記グリムや翌年の『西洋古事 神仙叢話』（音了法訳、集成社書店）を端緒として、明治末年までに一四六編あつた。（註<sup>2</sup>）

主に『少年世界』や『小国民』などを含む雑誌類であつたが、十編は単行本で上梓されている。こうしたグリム童話の日本での翻訳・翻案が昔話化しているのだから、まさに書承から口承への典型といえる。

日本で「馬と犬と猫と鶏の旅行」という昔話が語られている。「1、馬と犬と猫と鶏が飼い主に、（a）酷使され、または（b）貧乏になつたので逃げる。2、森の中または一軒家に寝てると、泥棒が来て金を分配する。3、一緒に声を立てるとき、泥棒は驚いて金を置いて逃げる。4、動物たちはその金で、（a）旅行をつづける。または（b）幸福に暮らす」（註<sup>3</sup>）という内容は、各地で報告されている。明治期に八編翻訳・翻案されたうちのどの翻訳・翻案が広まつたと指摘は出来ないが、登場動物、モチーフ構成からみて、日本の「馬と犬と猫と鶏の旅行」が、グリムの「ブレーメンの音楽隊」（KHM27）に依拠していることは明らかである。

また、「大木丸と木の葉姫」と題して記録されている昔話がある。「爺と婆がいる、爺は山で大きい木の股にいる男の子を見つけ、家へ連れ帰る。婆は川で木の葉の舟に乗つた女の子を見つけ、家へ連れ帰る。男の子は大木丸、女の子は木の葉姫と名付けられる。爺婆がいないとき、鬼婆がきて一人を食おうと追いかける。大木丸はバラの木、木の葉姫はバラの花に変身し姿を隠す。鬼婆はそれに気づきまた追いかける。大木丸は池、木の葉姫はあひるに変身、あひるが鬼婆をころす。神が大木丸には弓矢、木の葉姫

には包丁を与える。二人は山で暮らす」<sup>(注4)</sup>という内容。樋谷明が日本では珍しいとして追究を試みた<sup>(注5)</sup>昔話なのだが、岩手・福島・群馬・長野・大分の各県で記録されている。

これは主人公名は似ても似つかない名前となっているものの、モチーフ構成からみて、グリムの「みつけ鳥」(KHM5)と関わっているに違いない。グリムの「みつけ鳥」は、「山番が木の上で男の子をみつけ、家に連れ帰り、みつけ鳥と名付ける。山番の家にはレン坊という子がいる。山番が留守のときに家の料理人のお婆さんがみつけ鳥を殺そうとする。みつけ鳥とレン坊は逃げる。下男が追いかける。みつけ鳥は教会に、レン坊は天蓋に変身する。

今度はお婆さんが追いかける。みつけ鳥は池に、レン坊は鴨に変身する。鴨がお婆さんを殺す」という話。日本の「大木丸と木の葉姫」は「逃走譚」に分類できるのだが、同じ「逃走譚」でも、「食わず女房」「牛方山姥」「三枚の護符」「鬼の子小綱」などと大きく違うのは、主人公たちが逃げるときに「バラ・バラの木、池・あひる」に変身することである。この変身モチーフは

日本の「逃走譚」には見当たらない。ただ「大木丸と木の葉姫」の中にのみみられるのだから、日本の昔話の中について、「大木丸と木の葉姫」は異質な存在といえる。なぜ異質な変身モチーフを持つ昔話が日本に存在するのか。それは、グリム童話「みつけ鳥」を基にした翻案が巷間に広まり、昔話として語られるようになったからと考えるのが妥当であろう。<sup>(注6)</sup>

子どもたちによく知られている「豆と藁と炭」(KHM18)も同

様である。埼玉・群馬・新潟・鳥取・長崎で記録された「金の魚」系の昔話は、グリム童話「漁夫とその妻の話」(KHM19)を下敷にしている。「静岡県伝説昔話集」<sup>(注7)</sup>所収「オイチ、オサン、オトミの話」は、「二つ目、二つ目、三つ目」(KHM130)の翻案が基になっている。野村純一は、グリム童話「ズルタンじいさん」(KHM48)の影響下にある昔話として岩手の「狼と犬」「狼に助けられた犬」、広島の「牛と狐と獅子」をあげている。<sup>(注8)</sup>

これですべてではないが、このようにグリム童話から口承世界へ移った昔話はかなりの数にのぼる。そして、口承化した昔話は、翻訳・翻案の文字の通りに伝わったのではなく、独自の話であるかのように語り換えられている。柳田國男をして「オイチ、オサン、オトミの話」を、「よほど変わった形、あるいは古型か」<sup>(注9)</sup>といわしめたほどの改变ぶりなのである。書承から口承に入り、何人もの口を経ているがゆえに、昔話の内容がどんどん変わっていった結果なのだろう。

グリム童話以外にも、書承から口承へと流入した昔話の例をあげることができる。「大工と鬼六」は、櫻井美紀によつて明らかにされたのだが、北欧のオーラフ上人の教会建立伝説を大正十一年(一九二二)に水田光が「鬼の橋」として翻案し、それが各地で語られ、昔話資料に混入した昔話なのである。「味噌買橋」も岐阜県高山市の小学校教諭小林幹が「世界童話大系」第七巻所収「スマーフアムの行商人」を翻案したものが世に広まつたという。<sup>(注10)</sup>各地に伝わる「雪女」伝説も類話を探討していくと、小泉八雲の

『怪談』所収の「雪おんな」の伝説といえる。注釈

長く例をあげてきた。日本の伝承と思われていた昔話や伝説も、その元を書承文芸とするものが少くないのである。つまり、明治期後半以後、本を読んで語られた話が、いつか口伝えの文芸に入り込み、伝統的な昔話、伝説であるかのように処遇されてきたというわけだ。ということは、今日、大都市や地方都市で、新しい語り手によって語られている昔話も、同じように「承化する可能性を持つていていることになるのではないだろうか。

### B 大都市の語り手

- 1、伝承の語り手（方言）
- 2、方言の語り手（方言、共通語）
- 3、共通語の語り手（共通語）

項目を見ると、AもBも変わりはない。2の方言の語り手の使用する言葉が違うので、AとBに分けたのである。

#### A—1、伝承の語り手

これまで昔話の語り手と呼ばれてきた人々。岐阜市内に住む増山たづ子は、一九一七年に岐阜県揖斐郡徳山村に生まれた。子どものころ母の実家の祖母の語る昔話を聞いて育つ。大きな声で身ぶり手ぶりを混じえてたくさんの方言で昔話を語る。徳山ダム建設のため村を立ち退き、岐阜市内に移り住む。写真婆ちゃんとしてしばしばマスコミに登場し、読書好きな文字を知る昔話の語り手。佐賀県在住の蒲原タツエも手紙好きの文字をよく知る語り手。祖母から聞いた昔話を語る山形県在住の渡部豊子は、物語を創作するほどである。つまり、今日いうところの伝承の語り手というのは、内は使用している言葉。A・Bは便宜的分類。

#### A 地方及び地方都市の語り手

- 1、伝承の語り手（方言）
- 2、方言の語り手（方言）
- 3、共通語の語り手（共通語）

A—2、方言の語り手  
その土地の方言で昔話を語るのだが伝承の語り手と違つて、管理する昔話の大半は本を読んで得たもの。「伝承の語り手」と区別するため「方言の語り手」と呼ぶことにする。秋田県雄勝郡羽内は使用している言葉。A・Bは便宜的分類。

後町「昔語り伝承館」に勤務する中川文子は、同町の伝承の語り手・故阿部悦から昔語りを学び、阿部悦の昔話や県内の昔話を本で読み、それを覚えて方言で語っている。現在では秋田県内各地で昔語りの講師として招かれるなどの方言の語り手になつている。山形県新庄市の鈴木敏子は、東京の大学を卒業後郷里新庄に戻り、民俗学者大友義助の指導を受け、『新庄の昔話』所収話を覚えて、新庄弁で昔話を語っている。全国を昔話講演している岩手県遠野市の細越雅子や福島県の横山幸子も方言の語り手といえる。地方において伝承の語りが途絶えた後、その土地の主要な昔話の語り手となるのは、この方言の語り手であるのはいうまでもない。

#### A—3、共通語の語り手

地方の図書館などで子どもに共通語で昔話を語る語り手。本で覚えた昔話を語る。日本の昔話だけでなく、グリム童話をはじめ世界の昔話を語る。方言を使うことのできない若い世代の人が多い。

#### B—2、方言の語り手

大都市在住で、伝承の語り手ではないが、生まれ育った土地の方言で昔話を語る語り手。埼玉県川口市の藤野時代は、津軽弁で昔話を語る。幼いときに聞いた昔話も語るので、伝承の語り手の要素もある語り手。藤野の語る昔話は、津軽の話(津軽)だけではなく、日本の他地域の話、外国の昔話もある。東京都立川市の君川みち子は故郷山形県寒河江の言葉で昔話を語る。藤野と同様、外国の昔話も共通語で語る。大人向けに語るときは山形弁で、子どもに語るときは共通語で語り、二種の言葉を聞く対象によって使分けるというのが大都市における方言の語り手の特徴。

#### B—1、伝承の語り手

伝承の語り手は地方にいるだけではない。大都市にも伝承の語り手は何人もいる。幼いときに地方で祖父母から昔話を聞いて育つたのである。成人して大都市で就職、結婚、育児、その中で子どもたちにお話を聞かせるお話をボランティア活動と出合い、か

### B—3、共通語の語り手

現在の日本で、一番多い語り手。日本の昔話だけでなく、世界の昔話、児童文学、詩など、語りのジャンルは広い。対象は主として子ども。語りの場所は、学校・図書館・地区センターなど。すべて本から覚えて語る。

### 四 再び、書承から口承へ

今日の日本のさまざまな語り手を六つのグループに分けてみた。右のようにきちんと分けられるわけでもないかも知れない。実際はそれぞれが錯綜しあいながら語り活動が行われている。ただ、これらの語り手によって、日本の昔話が語り続けられている。たということは確かなことだ。いずれ、A・Bとともに1、2はなくなり3の共通語による語りの時代がくるだろう。それでも昔話は語り続けられるのである。書承昔話を覚えて語つたとしても、それを聞いた子どもたちが、聞いた話を語り出せば口承の分野に移っていく。第二章で述べた明治・大正期の例は、すべてこの営みの所産であった。近代における営みが現代において不可能ということがないであろう。とするならば、昔話の終焉を宣言するのはまだ早いといわざるを得ない。

昔話の継承は、研究者側にあるのではなく、多くの研究者が一顧だにしない、方言の語り手や共通語の語り手の掌中にゆだねら

れているといえるのではないだろうか。

#### 注

- (1) 川田順造「シンポジウムで問われたことを考える」(『口承 文芸研究』24号所収) 日本口承文芸学会 一〇〇一年  
(2) 川戸道昭・他『日本におけるグリム童話翻訳書誌』ナダ出版センター 一〇〇〇年  
(3) 関敬吾・他『日本昔話大成』第11巻「昔話の型」角川書店 一九八〇年  
(4) 民話と文学の会編『福島高女民話集』民話と文学の会 一九八八年  
(5) 樋谷明「おおぎ丸と木の葉姫—群馬県六合村の昔話から—」(『昔話—研究と資料—』第5号所収) 三弥井書店 一九七六年  
(6) 大島廣志「グリムの変容—『大木丸と木の葉姫』をめぐつて」(『國學院雑誌』第95巻8号所収) 國學院大学 一九九四年  
(7) 静岡県女子師範学校強度研究改編 静岡谷島屋書店 一九三四年  
(8) 野村純一「グリムの行方」(『同朋』72・73・74) 同朋舎出版 一九八四年  
(9) 柳田國男監修・日本放送協会編『日本昔話名鑑』日本放送協会 一九四八年

(10) 櫻井美紀『昔話と語りの現在』久山社 一九九八年  
(11) 大島廣志『雪おんな』伝承論』(國學院雑誌) 第99卷11号  
國學院大學 一九九八年

(12) 佐島信子『北上川のほとりで』語り手たちの会 二〇〇三年

(13) 渡辺和子『ばばちやにもらった たからもの』日本子ども  
の本研究会 二〇〇〇年

(14) 『聴く・語る・創る』第七号「和歌山の民話—矢部敦子の語  
り』 日本民話の会 一九九九年

(15) 藤野時代『津軽の詩—我が家の語り』語り手たちの会  
一九九四年

(おおしま・ひろし／國學院大學)